

日本と韓国における高齢化の一考察^{*}

～調査報告を交えて～

濱 元 一 美^{**}・柴 谷 貴 子^{***}・祖父江 鎮 雄^{***}

Discussion on the increasing elderly population in Japan and Korea : Comparison of study findings

Kazumi Hamamoto, Takako Shibatani, and Shizuo Sobue

要 約

核家族化と少子化の進展によって、若年世代は高齢者になじみが薄く、イメージし難いことが推測される。その一方で、医療従事者を目指す若年世代である学生は、高齢社会に対応できる医療や介護を検討していかなければならない。本学における歯科衛生士を目指す学生においても、例外ではない。つまり、高齢社会に対応できる人材となるためには、高齢化の状況を踏まえ高齢者を理解することが重要となる。そこで、医療従事者である歯科衛生士を目指す本学歯科衛生士コースの学生が持つ高齢化意識の現状を把握することにした。我々はその現状を把握することによって、高齢社会に対応できる人材の育成を図るべく教育につなげていきたいと考えるからである。

今回、日本と隣接し敬老精神と老親扶養を伝統文化に持つ韓国に着目した。韓国の高齢者施設および歯科衛生士を養成する大学を訪問し、調査を行った結果を、日本の高齢化状況と比較した。その結果、高齢化意識は韓国の学生の方が日本の学生より高いことがわかった。日本の学生の意識を高めるためには、高齢者とのコミュニケーションを深めると良いことが示唆された。

Abstract

As the ratio of nuclear families increases and people have fewer children, the younger generation has fewer interactions with the elderly, making it difficult for the younger generation to have an appropriate view of the elderly. Students who aspire to become medical professionals must study approaches to medicine and nursing that are suitable for aged societies. This also applies to dental hygienist students at our college. In order to raise medical professionals who can effectively function in an aged society, it is necessary for them to understand the elderly and their circumstances. The present study was conducted to determine the awareness of the life of the elderly by students at our college who aspire to become dental hygienists in an attempt to nurture students who effectively function in an aged society.

In the present study, we visited nursing homes and dental hygienist universities in Korea, a country close to Japan that has similar traditions and a culture of respect and care for the elderly. The results obtained in the two countries were compared and are discussed. Our findings indicated that Korean students' awareness of the life of the elderly is more sensitive than our Japanese students' awareness. We suggest measures for increasing the interactions of our students with the elderly to improve their awareness.

Key words : 高齢者 Elderly、医療従事者 medical professionals、高齢社会 aged society、敬老精神 respect for the elderly、老親扶養 care for the elderly

^{*} 本論文の要旨は、平成 16 年度日本歯科医療管理学会関西支部学術大会（平成 16 年 8 月 22 日）において発表した。

^{**} 関西女子短期大学 助教授

^{***} 関西女子短期大学 教授

はじめに

日本は高度経済成長を成し遂げ産業構造の変化をもたらしたと同時に、職を求め人口は都心に集中し核家族化現象が起きた。さらに、女性の高学歴化は、女性の社会進出となり、少子化傾向になるなど家族の形態や構成は大きく変化した。その一方で、平均寿命が伸び急速に人口の高齢化が進展し、寝たきりや痴呆、あるいは虚弱を合わせた要介護高齢者人口も増加の一途をたどっている。核家族化と少子高齢化が進み、老夫婦のみの世帯や高齢者の独居世帯の増加によって、要介護高齢者の介護は家庭内だけではなく社会全体で援助する必要がでてきた。医療・介護・年金といった高齢者に関する社会保障への関心が高まるなか、医療従事者は医療や介護の援助者として高齢社会に対応していかなければならない。しかしながら、医療従事者を目指す若年世代である学生は、核家族化と少子化の進展によって、身近に高齢者が存在しないため、高齢者になじみが薄くイメージし難いことが推測される。高齢社会に対応できる人材となるためには、高齢化の状況を踏まえ高齢者を理解することが重要となる。

本論の目的は、医療従事者である歯科衛生士を目指す本学学生が持つ高齢化意識の現状を把握することにある。我々はその現状を把握することによって、高齢社会に対応できる人材の育成を図るべく教育につなげていきたいと考えるからである。

今回、手始めとして、隣接し敬老精神と老親扶養を伝統文化に持つ韓国に着目し、韓国の高齢者施設および歯科衛生士を養成する大学を訪問し調査を行った。その結果を、本学学生の高齢化意識と比較しながら報告する。Ⅰでは、韓国の高齢化状況を概観し、Ⅱでは、韓国の高齢者施設を視察した調査結果を報告する。Ⅲでは、日本と韓国の歯科衛生士を目指す学生に行ったアンケート調査結果から高齢化に対する意識を比較する。最後に、学生にとって必要で

ある高齢化教育への課題を考察する。

Ⅰ 韓国における高齢化状況

韓国は、年長者や高齢者に対して敬いの精神が強く、老親扶養の伝統が維持されているものの、高齢者に関する社会保障などは、まだまだ充実していない。そのため、高齢者との同居率は低下し家族形態が変化しても、高齢者を支えるため子世代が経済負担をしている。韓国における高齢者を取り巻く社会背景について紹介する。

1. 高齢者の経済背景

韓国は2000年に高齢化社会に突入したばかりであるが、22年後の2022年には高齢社会になると予測されている。これは、1970年に高齢化社会に突入し、24年後の1994年に高齢社会となった日本と、そのスピードは類似していることが考えられる。

高齢化が進む一方で、高齢者に対する社会保障に関するシステムは、まだまだ充実しておらず、子世代が経済負担をしている。高齢者に関する社会保障のシステムや家族との同居状況などから、高齢者の経済背景を取り上げていくことにする。

社会保障システムとしては、1977年に導入された医療保険制度は1989年に国民皆保険が実現し、1988年に導入された国民年金制度は1999年に皆保険が実現した¹⁾。高齢者の介護保障は、現在、救済対策という意味合いが濃く、2022年には高齢社会を迎える韓国にあって、介護保障政策が着手、整備されているとはいえない状況にある²⁾。高齢者は高い年齢階層に

1) 1997年に導入された医療保険制度は、当初500人以上の事業所に勤める労働者が対象であった。1960年に公的年金がはじめて導入されたが公務員を対象とするものであった。1988年国民年金制度が導入されるまで、軍人年金、特殊職域年金のみ施行されていた。

なるほど何らかの介護を必要とし、独立して日常生活を行うことが困難となっており、今後も増加すると考えられる。その一方で、高齢者の生活基盤は非常に弱いものとなっている（表1参照）。なぜなら、国民皆年金が1999年4月に開始されたばかりであるため、大半の高齢者にとって年金は収入源となっていないのである。韓国の国民年金制度は、1988年当時、20年間の加入期間と60歳以上を受給資格要件として作られた。そのため、2008年になってから、ようやく一般国民は、年金の受給が可能となる。高齢者の主な収入源が日本の場合、公的年金であるのに対し、韓国では子どもからの援助が中心となっており、年金制度の成熟の違いが伺われる。

高齢者は経済援助を子どもに頼らざるを得ないという状況にある一方で、子どもとの同居世帯は減少傾向にある。1998年の韓国保健福祉部の調査によると、高齢者の単独世帯は20.1%、夫婦世帯は21.6%、子どもとの同居世帯は53.2%となっている。1990年には高齢者の子どもとの同居世帯は72.4%であったことから見ると、同居率は低下し家族扶養が変化している。この背景には、産業化や都市化の進行、また、住宅建設政策³⁾が関与している。

表1 生活費充当方法（韓国）

(単位: %)	
区 分	高齢者のいる世帯
同居家族の収入	70.0
不動産、貯金利子	15.7
年金、退職金	3.9
非同居家族の援助	35.4
国の援助	7.8
その他	3.9

注：この調査は重複回答である。なお、「その他」は、宣教団体や親類等の援助による生活費の充当の場合である。

資料：韓国保健福祉部「1998年度全国老人生活実態及び福祉欲求調査」1999年。

- 2) 角田由佳・許棟翰 「韓国における介護需要の実態と将来推計—日本の高齢化状況と比較しながら—」『九州国際大学経営経済論集』、2001年7月、p.136。
- 3) 1980年代末頃から住宅建設などの政策を積極的に推進し、住宅資金供給が大きく増加している。

日本の家族形態においても、高齢者の子どもとの同居率は低下している（表2参照）。1990年にあたる平成2年の高齢者の子どもとの同居世帯は59.7%、1998年にあたる平成10年では50.3%と推移している。日本においても、子どもが親を支えていた時代があった。高齢者は跡取り家族と同居し、同居によって高齢者を経済的に支え、必要に応じて介護するといった高齢者扶養を行っていた。しかしながら、さまざまな社会背景とともに高齢者への社会政策を必要とし、高齢者扶養の形態が変化してきた。

韓国における高齢者への社会保障システムの未整備や家族との同居率の低下から考えあわせると、高齢者に対する経済的援助のみならず介護も子世代に波及することが考えられる。しかしながら、今もなお韓国は依然として儒教的な倫理や対処方法を踏まえた独自の絆や敬老精神の姿勢を保っている。

つぎに、この韓国独自の姿勢は、どのようにして国民に培われるのであろうか、探ることにする。

2. 敬老親孝行の教育

韓国の高齢者は、今のところ年金などの収入源が確定しておらず、そのうえ、日本で作られた介護保険制度のような介護に関する社会政策も、まだ導入されていない。しかしながら、韓国独自の敬老精神や老親扶養の伝統的文化によって、子世代を中心とし、高齢者を支えている。韓国文化には儒教思想が国民生活の中に息づいており、長幼の序は健在であり敬老精神が根強い。日本は封建制度となる家父長的な家族制度を廃止したのに対し、韓国政府は民族的なアイデンティティを強調している。子どもによる親の扶養義務の強化と同居の奨励などの家族制度を保持してきた。家庭、社会、幼稚園から高等学校まで敬老親孝行の教育が義務化されている。また、韓国政府は、毎年敬老週間に全国の孝行者に勲章を含む表彰を行い、副賞金も授与している。各行政機関および民間企業も、そ

れぞれに孝行者、伝統的家風を保持している家族に対して表彰および賞金を出している。日本にも高齢者を敬う「敬老の日」という日が存在

し、各自治体や市町村などで高齢者に対してお祝い金や記念品を贈っている。しかしながら、高齢者を支える者に対して表彰や賞金を出す

表 2 日本における 65 歳以上の者の状況
家族形態別にみた 65 歳以上の者の数及び構成割合の年次推移

年次	総数	ひとり暮らし	夫婦のみ	子と同居			その他の親族と同居	非親族と同居
				総数	子供夫婦と同居	配偶者のいない子と同居		
推計数 (単位: 千人)								
昭和 55 年	10 729	910	2 100	7 398	5 628	1 770	300	21
60	12 111	1 131	2 791	7 820	5 800	2 019	343	26
平成 2 年	14 453	1 613	3 714	8 631	6 063	2 568	473	22
7	17 449	2 199	5 125	9 483	6 192	3 291	611	31
10	20 620	2 724	6 669	10 374	6 443	3 931	816	36
11	20 811	2 703	7 007	10 254	6 039	4 216	815	31
12	21 827	3 079	7 216	10 718	6 408	4 310	770	43
13	23 073	3 179	7 802	11 173	6 332	4 841	878	41
14	23 913	3 405	8 385	11 251	6 249	5 002	830	42
構成割合 (単位: %)								
昭和 55 年	100.0	8.5	19.6	69.0	52.5	16.5	2.8	0.2
60	100.0	9.3	23.0	64.6	47.9	16.7	2.8	0.2
平成 2 年	100.0	11.2	25.7	59.7	41.9	17.8	3.3	0.2
7	100.0	12.6	29.4	54.3	35.5	18.9	3.5	0.2
10	100.0	13.2	32.3	50.3	31.2	19.1	4.0	0.2
11	100.0	13.0	33.7	49.3	29.0	20.3	3.9	0.1
12	100.0	14.1	33.1	49.1	29.4	19.7	3.5	0.2
13	100.0	13.8	33.8	48.4	27.4	21.0	3.8	0.2
14	100.0	14.2	35.1	47.1	26.1	20.9	3.5	0.2

注: 平成 7 年の数値は、兵庫県を除いたものである。

資料: 平成 14 年 国民生活基礎調査の概況、目次 結果の概要、世帯数と世帯人員数の状況。

厚生労働省大臣官房統計 情報部社会統計課 国民生活基礎調査室

出所: 厚生労働省『平成 14 年国民生活基礎調査』

<http://www.mhiw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosu02>

いったシステムが制度化されているわけではない。日本は、欧米型の福祉を後追いし、対処療法的に年金保険制度や医療保険制度を作り、新たに介護保険制度までも作り上げた。国は社会保障制度を責任としている反面、多くの問題が残されている。日本の社会は西欧化し、福祉施策も大きく影響を受けているが、その内容は安定しておらず、議論が絶えないのが現状である。韓国の福祉施策全体について、特に高齢者対策については、これから社会保障のシステムを構築していかなければならないが、韓国独自の文化が人との絆を強く支えている。言い換えると、人との絆が強いことによって社会保障システムが急を要していなかったのかもしれない。

つぎの章では、韓国政府や企業が高齢者を敬い孝行者を称える取り組みを検証できる高齢者施設での視察報告を述べていく。

II 韓国の高齢者施設視察報告

韓国における高齢者施設を訪問することによって、日本の高齢者施設とは異なる取り組みを実感した。韓国における高齢者施設は、介護保険などの制度によってシステム化されているわけではなく、各施設独自の方法で高齢者を援助していた。今回、訪問したソウル市に所在する2箇所、大邱市に所在する1箇所の施設での視察調査を報告する。ただし、言葉の相違に加え、短い滞在期間であったことから、そのすべ

てが理解できたわけではないことをご了解いただきたい。

まず、ソウル市に所在するA施設を紹介する。この施設の運営母体は、仏教の宗教団体である。国からの援助金は一切なく信者の寄付によってすべてが賄われている。建物の外観は、高級ホテルを思わせるものであった(図1-1参照)。設備は、医務室に加え、サウナやジム、ビリヤードやカラオケ室まである(図1-2参照)。構成員は、数人の住み込みや通勤の者であるが、常に数人の無償ボランティアがおり、全員私服である。入所者は入所費や食事代など、すべてが無料である。入所者は、身寄りがいない者や家庭の事情で同居できない者など、さまざまな理由によって自らが希望し入所している。入所者の収入源は、まったくなく経済状態は厳しい。入所者の日常生活動作は、自立しており、車椅子などを使用する者は今のところ誰もいない。

訪問した日、入所者がバスでレクリエーションに行く矢先であった。色とりどりのチョコグリを身にまとい、表情はとてもいきいきしている(図2参照)。入所者がレクリエーションに出かけるため、観光バスが施設に到着した。入所者のレクリエーションの費用は無料、バスの運転手は無償ボランティアである。これらの費用も、すべて信者からの寄付金で賄われているという。住み込みで働く人の子ども(5歳位の女



図1-1 A施設の外観



図1-2 A施設の多目的ホール

の子)が、当たり前前に施設内や入所者の周りを走り回る光景が印象的であった。レクリエーションに出かけるおばあちゃんを孫が見送るように、入所者と子どもは自然に言葉を交わし、スキンシップを図っている。施設で働く男性が「みんな家族」と言いながら、施設内を案内してくれた。その言葉通り、施設にかかわる方々や入所者すべてが家族、つまり、大家族といったイメージであった。

つぎに、同じくソウル市に存在するB施設を紹介する(図3参照)。この施設の運営母体は、カトリック教の宗教団体である。この施設も国からの援助金は一切なく信者の寄付によってすべてが賄われている。建物の外観は、リゾートホテルを思わせるものであり、景観もすばらしいものであった。設備は、医務室に加え、レクリエーションを行う多目的室などがある。信者の寄付によって、玄関や廊下に歩行器や車椅子が数台並べてあり、自由に使用できる。構成員は、数人の修道女であり、無償で住み込んで、そうじから入所者の世話まで行っている。定期的に医師が無償で施設を訪問し、入所者の診察を行うが、修道女が臨終を看取することも多々あるという。入所者は、入所費や食事費は無料であるが、光熱費のみ支払う必要がある。入所者は、身寄りがない者や家庭の事情で同居できない者など、さまざまな理由によって自らが希望し入所している。入所者の収入源は、子どもからの仕送り、年金、貯金、あるいは

働いて賃金を得ているなど、経済状態もさまざまである。入所者の日常生活動作は、概ね自立しているが、入所者の高齢化に伴い、歩行器や車椅子を必要とする者が出現してきたという。入所者がバスなどを利用して、外出することに対する規制はない。入所者のなかに、大学生に日本語を教えている先生が入所しており、大学と施設間の送迎を大学生が行っていた。また、大学生は、先生を訪問するため施設を自由に訪れるという。修道女は「家賃や食事代はまったく支払っていないし、ほしい服もないので、無償であっても困らない。自分達が入所者の母であり、子どもでもある」と述べた。さらに「入所者に頼られて、ここで一緒に生活できて幸せ」と付け加えた。修道女と入所者の全員が家族、つまり、大家族なのである。

最後に、大邱市に存在するC施設を紹介する。この施設の運営母体は、カトリック教の宗教団体であり、信者の寄付に加え一部国の補助金によって賄われている。建物は、15年前、日本をモチーフに建てられたという。2階建てで階段と段差だらけの老朽化した造りであった。設備は、リハビリ室や医務室が設けられていた。構成員は、住み込みの修道女、通勤しているナースとその他数人の従業員であり、ナースや従業員は、国から報酬を得ている。入所者は、身寄りがない者が大半で、国から紹介されて入所している。入所者の収入源は、国からの援助金であり、経済状態は厳しい。入所者の日



図2 A施設の入所者



図3 B施設の居室



図 4-1 C施設における入所者とボランティア①



図 4-2 C施設における入所者とボランティア②

常生活動作は、概ね自立しているが、入所者の高齢化に伴って、車椅子や手押し車を使用する者が増加しつつある。そのため、構成員達は、階段と段差を何とかしたいと思っている様子であった。

施設には、某電気メーカーの民間企業から数人の新入社員が入所者と一緒に遊んだり、リハビリに付き添うなど、さまざまな世話をしていた(図 4-1、図 4-2 参照)。これは会社のシステムに組み込まれたボランティア制度で、新入社員は、週 1~2 回決められた曜日に会社に行く代わりに施設に行くことが義務付けられているという。この施設には、会社の社員のみならず学生や地域住人など、毎日数人のボランティアが訪れ、日本とは異なる、韓国独自の入所者への援助方法であった。

以上、韓国において視察した 3 箇所の高齢者施設を紹介したが、いずれの施設も高齢者を当

たり前に援助していた。宗教団体、民間企業、学校、地域住人など、さまざまな人がいろいろな方法で高齢者を支えている姿勢は、韓国独自の文化なのであろう。

以下、これを裏付ける日韓学生の高齢化への意識を比較していく。

III 日韓学生における高齢化に対する意識調査

近年、韓国では、高齢者政策が講じられ試行に移され始めている段階である。そのため、制度としてではなく、宗教団体の奉仕精神に加え、民間企業や学校までもが、高齢者を援助するためにボランティアをシステム化するなど、独自の方法で高齢者に対する援助が実在している。日韓とも高齢化が進み家族形態は変化しているが、韓国は、独自のかかわり方によって高齢者を支えている。韓国は日本と比較して、高齢者意識が高いと考えて良いのであろうか、見ていくことにする。

1. アンケート調査

今回、日韓の若年世代が持つ高齢化への意識を比較することにした。若年世代として両国とも歯科衛生士を目指す大学 2 年生(2003 年度)を対象に、アンケート調査を実施した。日本の学生は、本学歯科衛生士コース学生 112 名全員とし、韓国の学生は Y 大学と T 大学の歯科衛生学部 139 名を無作為に抽出し、いずれも質問紙法によった。

以下、図 5 から図 11 にて、その結果を紹介する。

図 5 は、両国の学生がイメージする高齢者年齢を示している。高齢者をイメージする年齢を 65 歳と答えた学生が共に最も多く、韓国の学生は 42%、日本の学生は 47% であった。全体的に両国学生がイメージする高齢者の年齢に大差がなかった。

図 6 は、両国の学生が電車やバスなどでお年寄りに座席を譲った経験を示している。韓国の学生は 99% とほぼ全員がお年寄りに座席を

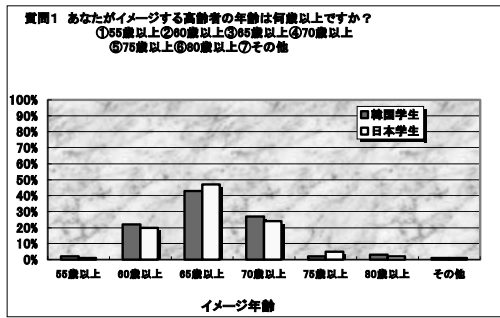


図5 イメージする高齢者年齢

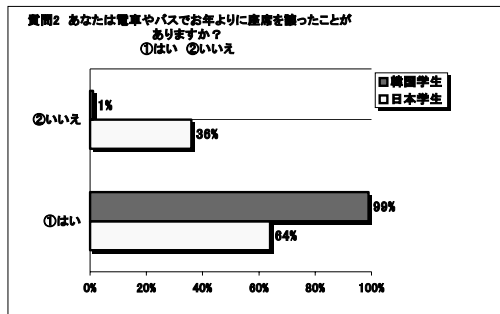


図6 座席を譲った経験

譲った経験があるのに対し、日本の学生は64%に過ぎなかった。

図7は、両国の学生が今後お年寄りに座席を譲ろうと思っているか否かについて「いいえ」と回答した結果を示している。韓国の学生は2%であったのに対して、日本の学生は5%であった。また、「いいえ」と答えた韓国の学生の2%のうち、1%は「マイカーしか利用しない」とコメント付きであったことから考えると1%と捉えられる。

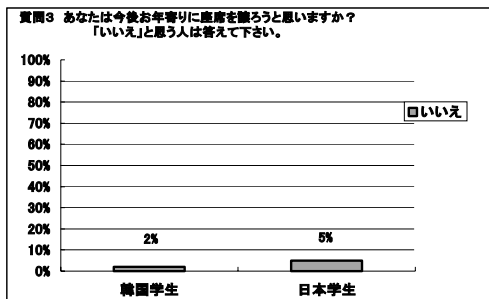


図7 座席を譲ることに対する考え

図8は、両国の学生が自国は高齢者にとって住みやすい社会であるか否かに対する回答を示している。韓国の学生は「いいえ」の61%、日本の学生は「わからない」の52%が最も高い値を示した。韓国の学生が選択した「いいえ」に対する理由は「高齢者への制度が遅れている」「同居率が低下している」などの回答が多かった。一方、日本の学生が選択した「わからない」に対する理由は「高齢者ではないのでわからない」「考えたことがない」などの回答が多かった。

図9は、両国の学生が「介護保険」という言葉を聞いたことがあるか否かに対する回答を示している。韓国では介護保険がないにもかかわらず、韓国の学生は9%が「はい」と回答した。日本では介護保険が施行されているが、日本の学生は89%が「はい」と回答したに留まった。

図10は、両国の学生が高齢者に対して歯科

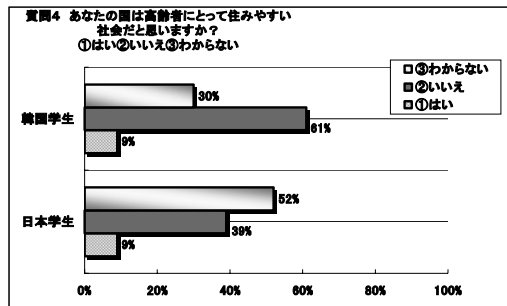


図8 社会に対するイメージ

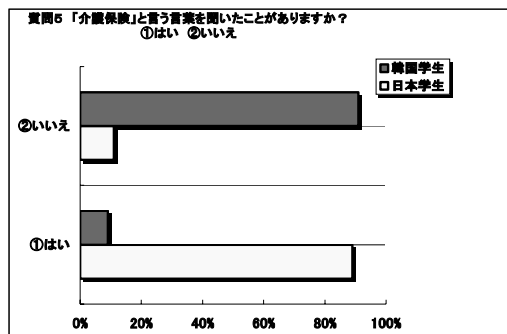


図9 「介護保険」の言葉に対する意識

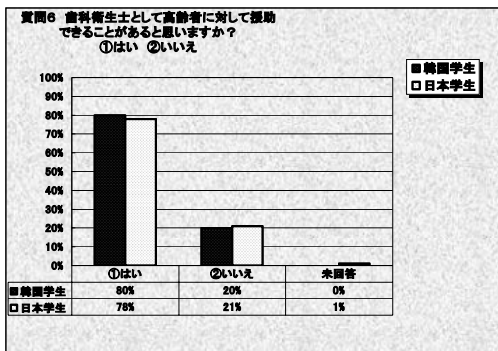


図 10 歯科衛生士としての援助

衛生士が援助できることがあるか否かの回答を示している。両国共に「はい」の回答が最も高く、韓国の学生は80%を示し、日本の学生は、78%を示した。また、具体的にどのような援助があるか自由記載にしたところ、韓国の学生はスクレーピングや歯磨き指導とし、日本の学生は口腔ケアとした。

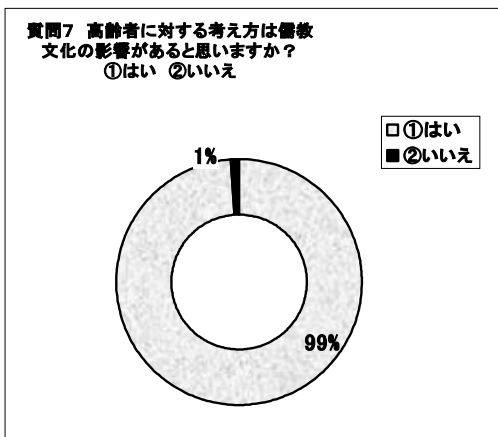


図 11 儒教文化の影響

図 11 は、高齢者に対する考え方は儒教文化の影響があるか否かについて、韓国の学生のみ質問した回答を示している。99%とほぼ全員が儒教文化の影響があると思っていることが明らかとなった。

2. アンケート調査結果が示すもの

今回、若年世代として韓国と日本における歯

科衛生士を目指す学生を対象に、アンケート調査を行った。その調査結果から、両国の高齢化に対する考え方を検討していくことにする。

まず、イメージする高齢者年齢については、両国の学生間で差異を認めなかった。これは、国際連合で一国における65歳以上の高齢者人口が全人口の7%を超えると高齢化社会とし、14%を超えると高齢社会と定義していることから、その影響が強いものと考えられる。しかしながら、両国の学生間で実際に高齢者に対するかわり方は、大きく異なっていることが明らかとなった。韓国の学生は、ほぼ全員がお年よりに座席を譲った経験を持っており、敬老文化の韓国では、当然なのである。さらに、約6割の者が、自国を高齢者にとって住みにくい社会であると捉え、その理由に「制度の遅れ」「同居率の低下」などを挙げていることから、若年世代は高齢化への関心が高く、敬老や老親文化が受け継がれていることが示唆された。一方、日本の学生は高齢者に配慮する意識に欠けるのか、お年よりに座席を譲った経験を持つ者は約6割に留まり、さらに、今後座席を譲りたいと考えていない者が全体の5%もいることは、非常に残念な結果となった。また、自国が高齢者にとって住みやすい社会であるかどうかについては、半数以上が「わからない」と答え、若年世代の高齢化への関心は、著しく低下していることが示唆された。

つぎに、介護保険という言葉を知っているかどうかについては、韓国では介護保険が実在しておらず、日本では実在しているといった社会保障の背景が異なるうえでの質問であるため、両国の学生間に差異があるであろうことを予想していた。予想通り韓国の学生は、約9割の者が、介護保険という言葉を知らないものの、約1割の者は、介護保険という言葉を知っており、そのなかに「日本にあると聞いている」「韓国にも必要」と自由記載されていた。これは、高齢化に対する関心が非常に高いことへの現われであると考えられる。一方、日本の学生は医

療従事者である歯科衛生士を目指しているにもかかわらず、約1割の者が介護保険という言葉を知らないという結果は、予想外の悪結果であった。歯科衛生士として高齢者への援助に口腔ケアを挙げている者がいる一方で、介護保険という言葉すら知らない者がいる。日本の学生間でも高齢化に対する関心に差異があることが伺える。韓国の学生のほぼ全員が、高齢者に対する考え方に儒教文化の影響があると答えているように、韓国の学生は、独自の教育から培われた高齢者への敬いやいたわりの心を持っており、当然、高齢化への関心も高くなっていることが示唆される。

この簡単な調査によっても、日韓の社会の差および若年層の高齢者に対する認識の差が明らかであり、高齢社会を担うべく日本の学生に対して、高齢化への意識を高める教育への課題が残される。

まとめ

染谷倭子氏は『1970年代前半当時、西欧先進国からは「日本では家族のきずなが強く、お年寄りを大切にする敬老の国」であるとみられ、われわれ日本人もそれを納得していた⁴⁾』と述べている。それから30年を経て、核家族化と少子高齢化の急速な進展によって、高齢者を取り巻く社会背景は大きく変化した。高齢者の経済面は、年金が成熟し子世代が老親の経済的扶養を負わなくなってきた。また、介護の社会化が進展するにつれ、子世代が要介護高齢者の介護を全面的に背負う必要もなくなった。しかしながら、日本の介護保険は、高齢者が最期まで一人暮らしを続けられる水準の介護サービスを提供できるところまでには届かない。そのため、高齢者は、自分が要介護高齢者となることへの不安を持っている。医療従事者は医療や

介護の援助者として高齢社会に対応していく必要があり、その果たす役割は大きいと考える。

本論が目的とした医療従事者である歯科衛生士を目指す本学学生が持つ高齢化意識の把握によって、若年世代である学生は高齢化への関心が希薄化していることが明らかとなった。日本の学生は、身近に高齢者が存在しないため、高齢者になじみが薄く、高齢化への関心も希薄化すると考える一方で、韓国における敬老や老親扶養の教育を受けた学生は、若年世代であっても高齢化意識が高く高齢者に対する援助は当たり前になっている。本学では学生に対して、高齢社会に対応できるようにとカリキュラムのなかで、高齢化に関する教育を工夫している。学生は高齢者への援助を学問として学んでいるため、歯科衛生士が高齢者に対する援助を、「口腔ケア」と答えることができる。しかしながら、日常生活のなかでは、お年よりに座席を譲るといった行為には結びついていない。その上、自国が高齢者に対して住みやすい社会かどうかともわからないのである。嵯峨座晴夫氏は「高齢化教育は福祉教育のなかの一分科として実践されてきているといえるが、そこでの高齢化教育はいわば高齢者あるいは高齢期についての教育が主であって、高齢社会についての全般的な問題に関する理解が十分にはかられているとはいえない⁵⁾」と述べているが、今回の調査によって日本の教育では、高齢者に対する援助を学問として捉えるに留まり、日常生活において高齢者を理解し援助するといった行為には届かない。また、現在、要介護高齢者である世代は、直系家族に生まれ育ち、戦前の教育を受け、戦争を体験した世代であり、学生は、戦後の民主教育を受け、戦後の経済発展とともに育った世代である。つまり、介護を必要とする者と介護を提供する者の世代間格差は非常に大きい。学生は、その世代格差を認識し理解した

4) 染谷倭子「社会変動と日本の家族—老親扶養の社会化と親子関係—」『家族社会学研究第14巻第2号』、2003年1月、p.113。

5) 嵯峨座晴夫『少子高齢社会と子どもたち』中央法規出版、2001年5月、p.32-p.33。

うえで、高齢者を援助する必要があると考える。

韓国の高齢者施設では、さまざまな方法でボランティアが繰り広げられ、高齢者を援助していた。なかでも、若年世代である新入社員や学生が定期的に高齢者施設に行き、高齢者とともに過ごすといったかわり方は、高齢者を理解するうえにおいて非常に意義あることだと考える。本学の歯科衛生士を目指す学生は、学外の実習として高齢者施設に行くが、入所者に対する歯磨きを中心とした実習内容に留まり、実習回数は2回に過ぎない。

今後、歯科衛生士が業とする業務内容を学内実習に取り入れるに留まらず、高齢者など人とのかわりを重視した内容の実習を展開する必要がある。つまり、人とのコミュニケーションを図ることが重要である。また、学生に積極的なボランティア活動の推進を図ることも必要である。そのためには、学生がボランティアを継続した活動ができる体制を構築していかなければならない。もちろん、高齢者施設からボランティア活動への参加に賛同していただけるように、学生に対して高齢者に関する基本的姿勢を教育する必要がある。我々は、学生自らが高齢化への現状を実感したうえで、高齢者への援助者となるような高齢化教育を構築していく必要があると考えた。今後、我々は、学生が高齢化の進展に伴う制度の形成に好影響をもたらす専門職種として活躍できる人材となるような教育を検討していかなければならない。

謝 辞

本研究は平成15年度関西女子短期大学奨励研究費の助成によるものであり、ここに深く感謝の意を表します。また、研究遂行にご支援を賜りました韓国の慶北大学校長金永進教授、驪洲大学林碩鉉教授を始めとする諸先生、ならびに高齢者施設構成員の皆様にご心より御礼申し上げます。

参考文献

- 総務庁長官官房高齢社会対策室「高齢者の生活と意識 第4回国際比較調査結果報告書」、1997年。
- 店田日廣文「転換期の高齢者—アジア3国（韓国、台湾、日本）の比較研究—」『アジア経済』XXVⅢ-6、学界展望、1997年。
- 鈴木利定『儒教のこころ』中央法規出版、1998年。
- 安弼濬『西風東風 わたしが見た日本の高齢者—韓国と比較しながら』エイジング総合研究センター、1998年。
- 柴田嘉彦『世界の社会保障』新日本出版、2000年。
- 広井良典『ケア学』医学書院、2000年。
- 『社会福祉用語辞典』中央法規出版、2001年。
- 江口敏一「韓国の高齢者福祉施策の方向性について 韓国の福祉理念を中心として」、西南女学院大学紀要、Vol.5.2001年。
- 仲村優一他『グローバル化と国際社会福祉』、中央法規出版、2002年。
- 白澤政和「利用者の観点から見た介護保険の課題」『老年社会科学 大会報告要旨号』日本老年社会科学会、Volume25-no2-2003年。
- 二木立「要介護老人を不幸せにしないために～医療経済学と医療政策研究の視点から～」『老年社会科学 大会報告要旨号』日本老年社会科学会、olume25-no2-2003年。
- 小塩隆士『社会保障の経済学』日本評論社、2001年。
- 庄司進一他『生・老・病・死を考える15章』ワールドプランニング、2003年。
- 古谷野亘他『新社会老年学 シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング、2003年。
- 『社会保障の手引き 平成16年1月改訂』中央法規出版、2004年。